帝京短期大学 紀要 No. 22：1－8，2021

学習指導要領「道徳」における道徳的価値の構造
――コールバーグの道徳性発達段階に関連付けて――

上　憲治

帝京短期大学　生活科学科

【抄録】

道徳的価値の構造についてマトリックス的に表現することについて記述している。マトリックスの横ラインは，学習指導要領「道徳」における環境的構造に従って配置され，縦構造は外面性と内面性と総合性（弁証性，中庸性，和の精神）が配置されている。

特別の教科道徳の評価は，評価しないということではなく，数値化しないということであるが，その評価は文学的表現に止まるものでなく，児童生徒の道徳的成長や道徳的価値についての学習成果を記述するものであり，本マトリックスの取組みの狙いとするところである。

英国倫理学の功利主義と直観主義のパラレル構造を取り入れ，特にコールバーグの道徳の発達段階と比較してマトリックスについて説明している。

（なお，本論文に関して，開示すべき利益相反関連事項はない。）

【キーワード】マトリックス，学習指導要領，道徳の 4 つの視点，直感主義，功利主義，L. コールバーグの道徳性発達段階，パラレル，学習成果

学指導要領の道徳的価値の構造は 4 つの視点に分類されている。

A　自分自身に関すること

B　人とのかかわりに関すること

C　集団や社会とのかかわりに関すること

D　生命や自然，崇高なものとのかかわりに関することであり，この視点の中に，小学校高学年と中学校では 22 個の項目があり，道徳的価値がそれらから導き出されている。

この 4 視点は環境的な広がりを含んでいる。具体的な広がりで，水平的な視点を含んでいる。目に見える世界であり，外面的である。図 1 のように表現できる。

これに対して，道徳的価値の深まりとしての課題がある。つまり内面的な道徳的価値の側面もある。学習指導要領ではこの価値構造は明らかにはされておらず，混在している。

その混在状況の顕著な側面は，D の視点「生

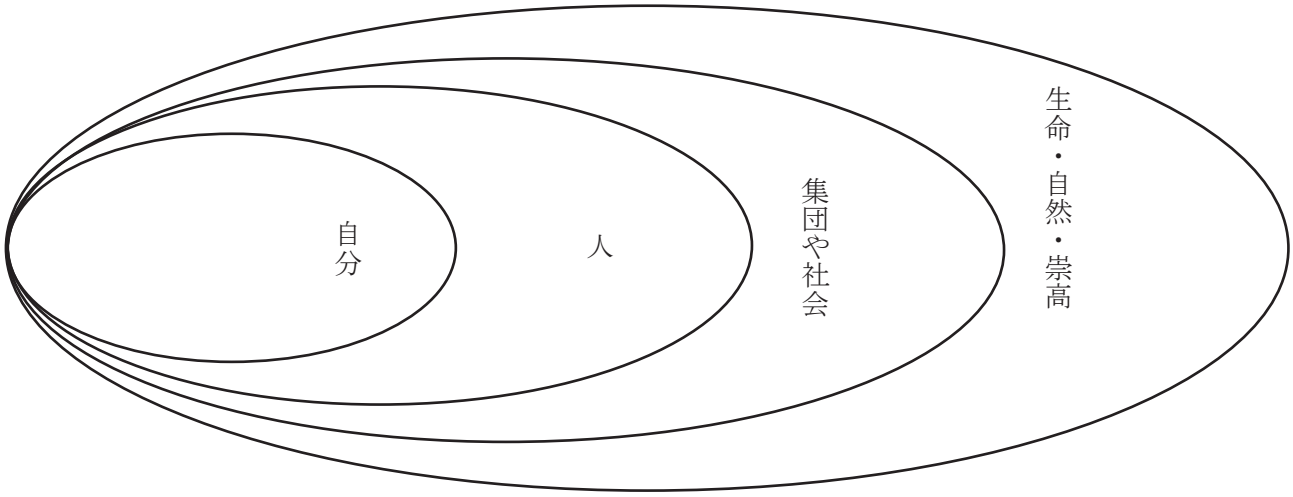

図 1

命・自然・崇高なもの」において見られる。生命や自然は具体的な対象物として認めることができる。一方，崇高なるものは具体的な対象物というよりは対象物から受け取ることができる我々の内面に起こる現象である。

しかしここには悩ましい問題がある。「生命」や「自然」というと私たちに「尊いもの」とか「すがすがしいもの」とかという心理的な現象が付随して起こる。これが「崇高なるもの」によって表現されている。道徳性は後者の心理的・内面的な現象に関わる。

この内面と外面は道徳的には密接であるので分離し難いのである。言語的にもお互いに引きずりあうことになり，思考の分明さを妨げることになる。この点の混乱を避けるために，思考実験的に外面と内面を構造化してみると表 1 のようになる。

横軸は 4 つの視点を図 1 に応じて配置している。縦軸 a，b，c は仮に内面的な現象面を何らかの基準によって分類するために置いてある。横軸の 4 つの視点はそれぞれ内面の側面を縦軸 a，b，c のように含んでいる。

4 視点はそうした内面的な様々な内容を未分類で抱え込んだまま一塊として我々に投げ込まれてくる。例えば，学習指導要領の A の視点「自分自身に関すること」における最初の項目 1 から「望ましい生活習慣」を例にとると，表 2 のように配置できる。

生活習慣自体には道徳的価値は付帯していないが，「生活習慣」という表現には a や c のような心理的評価感が張りついている。同様なことは他の項目においても言える。「目標」，「生活」等々。

そもそも道徳は評価価値を取り扱う問題であるからそこに評価感を表現しないということは自己矛盾の極みであり，欺瞞的である。日本の道徳教育はこうした矛盾と欺瞞の攪乱状況に陥り，その健全な機能がマヒして機能不全に陥っている。

しかしこれは児童生徒の継続的行動や人格評価をしないという文部科学省指導の方針に矛盾するものではない。あくまでも学習課題としての評価感の学習を対象とするものである。評価の数値化をしないという文部科学省方針によって，評価への姿勢を鈍らせられ，評価をしないという方針として解釈され，評価感の学習成果もあげようとしないというスリップ現象を起こしてしまうことになる。

欧米においてはこの点は，直観主義と功利主義の立場からアプローチされている。功利主義は人々の幸福をテーマとしており，学習指導要領の 4 視点は「個人的幸福」，「身近な人々の幸福」，「社会や国家・世界全体の幸福」，「人間の力の及ばない生命や自然・崇高なるものに関わる幸福」のように併記できる。これに対していつも論争敵対者の直観主義は理想主義と共同して「自己の人格の向上や理想的自己」，「他人を目的として扱う」，「理想的社会・国家の実現」，「生命・自然・崇高なるものの追及」をテーマとして探求する。

これら 2 つの功利主義と直観主義の対立は実はパラレルで交じり合わない議論である。この交じり合いへの試みはいつも双方で取り組まれている。功利主義者の継承者 J.S.Mill は幸福にランク付けをしている。価値の高い幸福と価値

表 2

外面 / 内面	自分自身に関すること「生活習慣」
a	望ましい
b	
c	望ましくない

表 1

外面 / 内面	A 自分自身に関すること	B 人との関わりに関すること	C 集団や社会との関わりに関すること	D 生命・自然・崇高なものに関すること
a				
b				
c				

の低い幸福の区別である。徳の高い人の幸福と低い人の幸福とでは幸福の大きさに違いがあるというのである。幸福に質の違いを導入したのである。しかしあまりしっくりこない面がある。近代以降の社会では万人の平等を原則とし，犯罪者の人権も保障する。犯罪者の幸福も一般市民の幸福も同じであるというスタンスである。この議論は長い歴史がある。

他方の直観主義的立場からの折衷的取り組みはH. シジィックにみることができる。直観主義の限界は個人の内面に引き籠っているところにある。そこで社会的なテーマに視点を移し，社会性をテーマとする。つまり理想的な人間性の向上にある人は，他の人に対しては自分の人格の高さに背かないような対応ができるし，社会形成においては高い人格に応じた社会的働きをするし，生命・自然・崇高なるものに対しては高い人格から派生する姿勢であるだろう，というように横的な広がりに即応するという主張である。

この観点で，黒川弘務検事総長の賭けマージャン問題はまさしくこの典型的なネジレで，野党やマスコミの賑やかさは人格の高さと社会貢献とは一致しているはずだという視点である。人格の低さは社会貢献も低いという論拠に立っているのである。これに対して聖書のマグダラのマリアの逸話が思い出される。娼婦（ユダヤ教では姦淫の罪で石打の刑で殺される）のマグダラのマリアを人々が石を投げて殺そうとしていたところ，さしかかったイエスが「心の中でも姦淫を犯したことがないという者はこの女を打て」と言ったところ，みな石を置いて去って行った，という。（マグダラのマリアは娼婦ではなかったという説が近年主張されている。）

こうしたパラレルな論争状況において，アメリカのL. コールバーグの主張にヒントを見出すことができる。L. コールバーグはJ. ピアジェの道徳の発生と発達理論に基づいて道徳性の発達段階を示しており，これは文部科学省の4視点の環境的広がりと関連付けられる。その理論によると道徳性の発達は以下のようである。（表3参照）

第1段階では，人間は幼少の頃は育児の中で罰せられたり褒められたりして良い行動と悪い行動を学習し，善悪の観念を取得する。道徳的な自我の形成である。学習指導要領の「A 自己に関すること」の範疇に入る。

第2段階では，他の人との関わりにおいて他の人を自分との利害関係で扱う。「B 人との関わりに関すること」であるが，カントの相手を手段として扱ってはならないという道徳法則に合致していない低い道徳性である。

第3段階では他の人と調和的関係を持ち，良い子であろうとする志向である。「B 人との関わりに関すること」であり，エゴイズムではなく相手のことを配慮するという第2段階より高い道徳性である。

第2段階と第3段階で「B 人との関わりに関すること」が扱われており，表1のBのaやcのような価値の高低を扱っている。

第4段階は「法と秩序」の問題で「C 集団や社会との関わりについて」の問題の範疇に入る。これは法や規則だから従うというスタンスである。

第5段階の「社会的契約的遵守主義」は英国ではCOMMON-SENSEの伝統があるが，英国紳士の条件として，みんなが大切にしている慣習や通念を尊重して行動するというスタンスである。これも「C 集団や社会との関わりについて」に含まれるが，コールバーグにおいては第4段階よりは高い姿勢である。第4段階と第5段階は表1では「C 集団や社会との関わりについて」のaやcに配置される。

第6段階の「普遍的な倫理的原理志向」は「D 生命・自然・崇高なるもの」に相当する。Dは人間を超越している世界であり，コールバーグの普遍性も超越性と考えられる。但しコールバーグにおいては普遍性には価値の高さが混入して

表3．コールバーグ道徳性6段階の発達段階

（第１段階）	（第２段階）	（第３段階）	（第４段階）	（第５段階）	（第６段階）
罰と服従志向	道具主義的相対主義的志向	対人関係の調和あるいは「良い子」志向	「法と秩序」志向	社会契約的遵法主義志向	普遍的な倫理的原理志向

おり，いわばカントの定言命法のように最高の道徳的価値を志向するものである。「D 生命・自然・崇高なるもの」を道徳的価値の高低に分けるというこの論文の趣旨から見れば道徳的価値の高低が混在した状況であるといえる。

第 7 段階もあるがさらに高いものであり，あまり分明に捉えられない[*1]。

以上のコールバーグ理論を日本の学習指導要領 4 視点と合わせて再構成すると以下の表 4 のように配置できる。

この表で未完成なのは感情と行為 A の c の欠陥である。コールバーグ理論の中にあげられていないこの部分を私たちは重視する。この表では a の行は基準が外部から来ている。しかし c の行では基準が自己よりにあり，外部に対する自己の主張が加わる。

そこで A の a 枠は自己主張的な内容が細く分析して抽出できると考えられる。自己成長という内容が考えられ，c に充当でき，表 5 で砂字部分のように補足できると考える。

コールバーグ理論で砂地部分の主張が弱いのは，ピアジェの発達心理学に寄っているところに起因すると思われるが，ピアジェも含めて，欧米キリスト教的人間観が背景にあると思われる。そこにあるのは外在的人間観であり，経験的・科学的欧米世界観である。これに対して c 行では内在的人間観に基づいているところがある。我々は自分の内的原理を志向する。個人の原理は個人の向上であるが，欧米的原理においては自己の向上は外部における展開にそれを見ようとする傾向がある。政治的・経済的・その他社会的成功・失敗が自己向上の基準であるが，我々にとっては，自己向上はそうした成功や失敗を基準とするだけではない。

表 4

外面 / 内面	A 自分自身に関すること	B 他の人との関わりに関すること	C 社会との関わりに関すること	D 生命・自然・崇高なるもの
a	（第１段階） 罰と服従志向	（第２段階） 道具主義的相対主義的志向	（第４段階） 「法と秩序」志向	（第６段階） 普遍的な倫理的原理志向
b				
c		（第３段階） 対人関係の調和あるいは「良い子」志向	（第５段階） 社会契約的遵法主義志向	（第 7 段階）

表 5

外面 / 内面	A 自分自身に関すること	B 他の人との関わりに関すること	C 社会との関わりに関すること	D 生命・自然・崇高なるもの
a	（第１段階） 罰と服従志向	（第２段階） 道具主義的相対主義的志向	（第４段階） 「法と秩序」志向	（第６段階） 普遍的な倫理的原理志向
b				
c	自己成長 自己原理に従う	（第３段階） 対人関係の調和あるいは「良い子」志向	（第５段階） 社会契約的遵法主義志向	（第 7 段階） 普遍倫理の体現

例えば，我々における自己嫌悪は，例えば太平洋戦争・大東亜戦争における自己嫌悪を取ると，2 面性がある。1 つは敗戦という表現による外面的結果である。ポツダム宣言を受諾して，連合軍支配下にあった（ある）ということであるが，もう一面の自己嫌悪は，止むを得ないとはいえ，戦争という行為に及んでしまったという，人間としての後悔である。理由があったとはいえ，正当防衛であったとはいえ，自己利益を主張したということの恥を噛みしめているのである。

やくざな心根ではこの真心（マシン）にある純粋潔白性に目をつけて攻撃するのが常套戦術である。しかしこの部分は人間個人の真心（マシン）において他人が触れられるものではない。これを攻撃するのは人間の真心を汚し，人間の存在性を否定するものであり，攻撃者の存在性も保証されるものではない。

こうした外面性と内面性を見ることができ，内面性への価値観を位置付けることができる。

次に，我々のマトリックス理論では b 行についての用意がある。b 行のビジョンは a 行と c 行の中庸的・弁証法的内容になる。私はこれを「和」の道であると思っている。つまり a 行と c 行とを包含して止揚する，つまり「和する」内容である。

我々の内的志向性とは心の姿勢と言える。この心の姿勢は普遍性を志向する。普遍性との合致を目指して日々の心の姿勢をチェックする機構が我々には内在している。孔子の「思うところを為して法を超えず」は内と外の一致という境地であるが，ここにおいては，法は内的法であり，処罰を背景においた法ではない。ソクラテスは「悪法といえども法である」として毒杯をあおいだが，自らの命をかけて悪法とは矛盾する内的普遍性の法を貫いたといえる。

一方，英国では直観主義と功利主義の倫理学上のパラレル立場が継続している。直観主義は個人の直観を信頼し，尊重する立場で，いわば個人の直観を獲得するところに基盤的な目的がある。個人世界の確立を目的とするという意味で個人主義と言える。

功利主義は最大多数の最大幸福ということで，人々や社会や国家の幸福をテーマとする意味では個人的とは言えない。これを学習指導要領の 4 視点に当てはめると以下の表 6 のようになる。

つまり，直観主義は自分が外部に対して発する行為やそれに伴う情動である。一方功利主義的には外部から自分に対して向けられる行為やそれに伴う情動である。構図的には以下のようになる。

・直観主義：自分 → 他人・社会（自分から向けられる行動）

・功利主義：他人・社会 → 自分（自分に向けられることへの配慮的処理）

道徳のマトリック構造の取組みは学習指導要領の構造を反映して道徳領域の環境的広まりを A，B，C，D の横軸とし，それら環境下での価値の多様性を a，b，c として，a は外面的な価値状況を功利主義的に位置づけ，c はその内面的価値状況を直観主義に位置づけ，両者の矛盾解消を b において，道徳的価値の選択肢的分類に取り組んでいる。

この各マトリックスの枠は以上のように分類されるが，道徳的価値の様々な表現は各枠において実施される。そこで価値についてのマトリックスが作成される。ここまでのマトリックスは状況のマトリックスとして，価値については踏み込まれておらず，価値が展開される環境と立場の洗い出しのために用いられる。

価値についてのマトリックスは価値表現を用いて作成される。その試案は上憲治（2019）「原

表 6

外面 / 内面	A 自分自身に関すること	B 人との関わりに関すること	C 集団や社会との関わりに関すること	D 生命・自然・崇高なものに関すること
a（功利主義）				
b（中庸・弁証法・和の道）				
c（直観主義）				

体験を資料化した道徳授業」（「押谷由雄編「自ら学ぶ道徳教育」保育出版社」）を参照していただきたい[*2]。

【参考文献】

*1 L. コールバーグ（1987）道徳性の発達と道徳教育 : コール ― バーグ理論の展開と実践 岩佐信道訳　広池学園出版社

*2 上憲治（2019）「原体験を資料化した道徳授業」「自ら学ぶ道徳教育」編著　押谷由雄編著　保育出版社」PP.165-171 に収録

Structure of moral value in the course of study "morality"
——In connection with the moral development stage of Kohlberg's——

Kenji KAMI

Department of Living Science, Teikyo Junior College

【abstract】

This paper describe the matrix representation of the structure of moral value. The horizontal lines of the matrix are arranged according to the environmental structure in the course of study "morality", and the vertical structure is arranged with externality, internality and comprehensiveness (defense, moderateness, Japanese spirit).

The subject of the evaluation in special subject morality is not that it is not evaluated, but that it is not quantified, but the evaluation is not limited to literary expression, and describes the learning outcomes of the moral growth and moral value of children and students. This is the aim of the efforts of this matrix.

It incorporates the parallel structure of utilitarianism and intuitionism in British ethics, and describes the Matrix, especially in comparison to Kohlberg's moral developmental stages.

(The authors declare no conflicts of interest associated with this manuscript.)

【Key words】 matrix, the course of study, four point of view, utilitarianism, intuitionism, Kohlberg's moral developmental stages, parallel, learning outcomes